

## 助成事業実施報告書

団体名 陸軍少飛平和祈念の会

代表者 副会長 鳥海 賢三

### 1. 助成プロジェクト名

陸軍少年飛行兵・平和祈念プロジェクト

### 2. 実施団体の概要(創設の経緯、創設時期=法人で、法人化前に任意団体での活動がある場合、その段階からご記入ください。会員数など。180文字程度まで)

東京陸軍少年飛行兵学校の生徒と職員による「少飛平和祈念館設立委員会」は、海軍予科練のような資料館の創設を求めてきました。この活動を平成 28 年 9 月に引き継ぎ、市民を交え、元少年飛行兵をビデオ収録してその声を後世に残し、将来的に少飛平和祈念館の設立を目指します。

### 3. プロジェクトの目的とその背景(※応募申請書に記載のものでも可) 250文字程度まで

陸軍の少年飛行兵(少飛)は、海軍の飛行予科練習生(予科練)と共に、若くして終戦時の特攻を担っていました。少飛の養成校の拠点が東京にあったことを再認識し、茨城霞ヶ浦の予科練平和記念館や南九州の知覧特攻平和会館等と並ぶ、陸軍少飛平和祈念館が必要と考えています。多摩地域に集中していた航空機の軍需工場等を再確認するとともに、元少飛の方々の思いを受け止め、戦争の悲惨さと平和の尊さを語り継ぐことが大切と考えプロジェクトを進めています。

### 4. プロジェクトの内容(※当初予定と変更がない場合は、応募申請書に記載のものでも可) 300文字程度まで

(1)高齢化した元少飛の方々のビデオ証言の収録を重点としています。最も若い元少飛の方でも90歳前後となりビデオ収録の限界に近づいています。(2)慰霊の機会などを通じて、元少飛の方々の情報を収集し、協力を求めています。(3)多摩地域の戦争遺跡等の住民団体と連携し、行政等への要望を進めます。(4)元少飛や専門家の講演会を持ち、会の周知と会員増を図ります。(5)九州大刀洗、萬世、知覧、鹿屋等の平和施設との連携を図っていきます。

### 5. プロジェクトの実施で得られた「結果」(OUTPUT。実施回数や参加者数など)、「成果」(OUTCOME。事業によって生まれた直接的な変化)、「社会的な変化」(IMPACT。事業が社会に与えた影響)などの『効果』 300文字程度まで

助成金を受けて作成したパンフレットやHPを利用し、いろいろな機会を活かして会の周知を図ります。同時に元少年飛行兵の情報収集を進め、証言ビデオ30名の目標達成を目指します。平成30年度は、15名弱のビデオ収録を実施、元少年飛行兵の情報収集も進んでいます。平成31年度は、さらに15名程度のビデオ収録を目指します。また近隣の平和関連の住民団体との連携を図ります。

### 6. プロジェクト実施にあたっての課題、今後の展望など 300文字まで

昨年度は、元少飛の生存者の発見が大きな課題になっていましたが、20人以上の元少年飛行兵の情報を得て、15名弱のビデオ収録を実行しました。本年度は、情報収集が、より困難になりますが、昨年同様、15名程度のビデオ収録を目指します。そのため、東京周辺から地方在住の元少年飛行兵をも対象に、ビデオ収録を進めていく必要があります。また、本会の活動趣旨の理解を求めてPR活動を並行して行い、会員の増加を図ってまいります。

### 7. 参考資料

元少年飛行兵のビデオ収録活動の新聞記事。 <http://sho-hi.sakura.ne.jp/>

# 元少年飛行兵の声残す

## 高齢化インタビュー急ぐ

戦時中に東京、大分、滋賀にあり、戦闘機の操縦士などを養成した「陸軍少年飛行兵学校」の記憶を後世に伝えようと、市民団体「陸軍少飛平和祈念の会」(事務局・立川市)が卒業生らへのインタビューを続けている。卒業生の高齢化が進む中、同会の鳥海賢三副会長(70)は「悲惨な戦争を繰り返さないために、元少年飛行兵たちの生の声を残したい」と語る。

## 市民団体「記憶後世へ」

### ■体験談を収録

「なぜ、少年飛行兵学校に入ったのですか」。千代田区内にあるピルの一室で、今月上旬、同会の鳥海副会長はビデオカメラのスイッチ

子を入れ、陸軍少年飛行兵学校の17期生で杉並区の柳橋晃一郎さん(88)に質問を投げかけた。柳橋さんは、陸軍将校の勅めで受験し、1943年10月に入学したという。当

時14歳だった。

2時間に及んだインタビューで柳橋さんは、「1年間、午前中は学科、午後は体操や軍事教練を受ける日々を送った」と回想。「田舎の子どものように体力はなかったので本当につ

らかった。夜、涙を流すこともあった」と打ち明けた。同会によると、学校は武蔵村山市と大分市、大津市にあった。1期から20期まで、10歳代の約4万5000人が学んだという。卒業後は、実技訓練を受けるな

どして戦場に送り出された。約4500人が戦死し、その約1割が特別攻撃隊の一員だったとされる。

柳橋さんは収録後、「戦争を二度と繰り返さないためにも、戦地に送られた少年飛行兵のことを知ってほしい」と語った。

### ■収集は難航

同会は昨年4月、卒業生のインタビューを始めた。最も若い20期の卒業生でも、80歳代後半になっており、「今、証言を集めておかなければ少年飛行兵の証言を集める機会が失われる」と危機感を募らせた。

ただ、証言集めは難航し

ている。同会では今年3月、2003年の時点で生存の確認が取れていた17期生366人にインタビューを依頼する往復はがきを送った。その結果、卒業生の遺族らからの返信で、すでに約70人が亡くなっていることが判明した。

120通は宛先不明で戻ってきてしまい、返信がないケースも相次いだ。生存を確認できたのは35人とどまっただうえ、「高齢で体調が悪いため、協力できない」といった理由で収録を断られることも多かったという。

### ■上映を検討

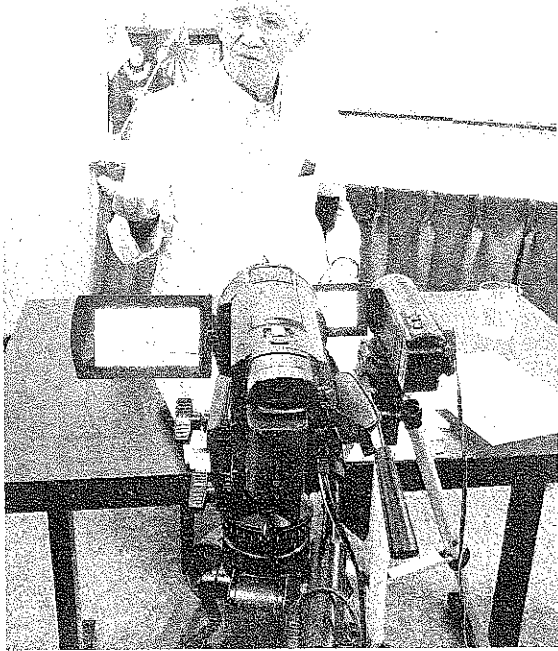
同会がこれまでに収録し

※ きたのは、同会メンバーや柳橋さんら7人。今年度中に15人に増やしたいという。

将来的には、「陸軍少飛平和祈念館」を建設する構想も温めており、卒業生らの証言ビデオを上映したいと考えた。鳥海副会長は「元少年飛行兵たちの証言を若い世代に伝えたい。そのためにも記録を残しておきたい」と話す。

祈念館を新設できた場合には、戦地で散った卒業生の遺品などを展示することも目指している。卒業生やその家族のもとには多くの資料があるが、展示スペースを確保できないこともあり、多くの人に目にしてもらえる機会を得られないというためだ。

同会では、インタビューに応じる卒業生を募集している。問い合わせは、同会のメール(heiwakinen@sho-hi.jp)へ。



陸軍少年飛行兵学校の思い出を語る柳橋さん(千代田区)